

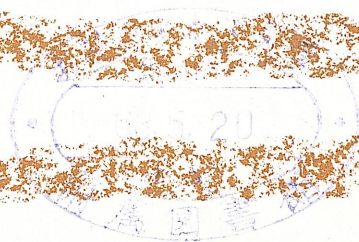
幼児の教育 昭和63年 6月1日発行(毎月1回1日発行)昭和23年4月15日第三種郵便物認可 第87巻 第6号

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1988

6



第 87 卷

第 6 号

日本幼稚園協会

一斉指導で楽しく展開する

幼児の運動 (全3巻)

近藤充夫・中西雄俊・石渡敬一・渡辺真一 共著



一斉活動でのびのび育つ
幼児の運動遊び集大成。
保育を楽しくする画期的な
全3巻です。



1. 大型遊具を使って
2. 小型遊具を使って
3. かけっこ・プール・運動会

- 豊富なイラストと適切な文章で、指導の方法が一目でわかります。
- 遊具別に分類されているので、例えば「平均台」でどんな遊びができるか、すぐにわかります。
- 一つの活動に対して応用例がたくさん示されているので、園の実情に合わせたり、創意工夫したりするのに大変役立ちます。
- 「うまくできない子ども」への配慮も充分にしてあるのが、本書の特徴です。

B5判・各200頁・定価各1,800円 セット定価5,400円

幼児の教育



第八十七卷

第六号

幼児の教育目次

——第八十七卷 第六号——

© 1988

日本幼稚園協会

〈巻頭言〉

新しい幼児教育をめざして……………黒田 成子…(4)

めがね……………津守 真…(6)

SF的読み解き 子どもという風景

第三十八回 やさしい狡智……………堀内 守…(12)

子どもと(3)

六月・ゆたかに……………清水 光子…(22)

森の組から——昭和63年2月22日(月)の保育——

お茶の水女子大学附属幼稚園三歳児・担任・村山英子先生…(26)



特集 傘・雨・子ども

絵画にみる傘——十七世紀オランダの場合——……………堤 委子……………(32)

開きかけた傘・浮世絵の少女の……………森下 みさ子……………(37)

雨の日の保育……………長山 篤子……………(40)

泥爆弾と水爆弾……………近藤 千恵子……………(44)

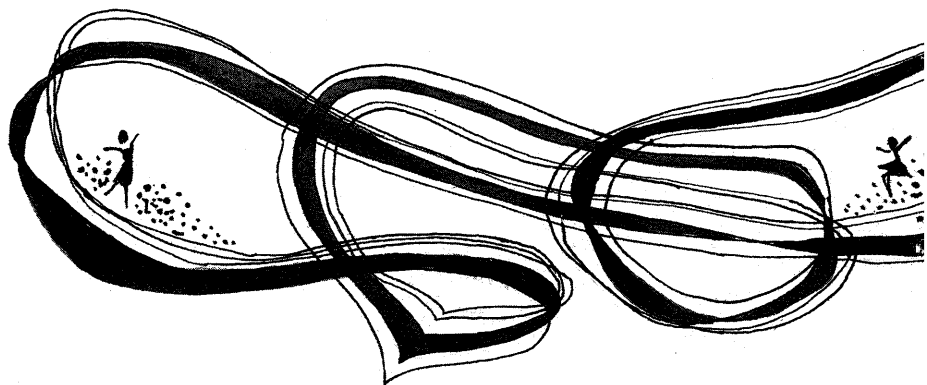
南の島の子どもたち(2)

想像性が豊かなホノカちゃんのこと……………浅野 恵美子……………(49)

若いお母さんたちへ

大きくなるということ……………はるにれの会 宮里 暁美……………(57)

カット・福田 理恵
編集部・向山 陽子



新しい幼児教育をめざして

黒田 成子

昭和六十一年九月に幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議から「幼稚園教育の在り方」が出された時は新鮮な驚きと共感をおぼえた一人である。翌六十二年十月に発表された教育課程審議会の答申に前述の「幼稚園教育の在り方」の視点がそのまま生かされていることを知ってさらに安緒感を感じた。

しかし、これからいよいよ日本の保育も変わっていくだろうと思う反面、正直に言うとなんか「今さら」という思いも無いとは言えない。「今さら」と思うのは、眞の幼児教育をめざして進みつつある園も既にかなりあるからではないだろうか。

幼稚園教育要領が近く改訂されることになっている。

これは画期的なことであるのに現場は意外に静かである。もっとも関心がたかまるのはこれからかもしれない。

現場の各園の実情は、たとえば意図的に教科的な面に重点をおく園があったり、特に六領域にこだわる園があったり、さまざまである。筆者の幼稚園でも昭和四十年代から遊びの保育をしてきたが十年位前まで指導計画は一応六領域で立てていた。それとはおよそ反対に実際は遊びの保育を展開し、その矛盾をいやというほど味わった。その後、保育者集団での話し合いを重ね、保育の活性化をはかった。昭和五十九年度からは子どもの成長の節目、ならびに園の諸行事を考え合わせ、一年を六期に

区切り、それぞれのねらいや内容、評価を行なうようになったが、今でも模索中である。

しかし、昭和六十五年からわが国の幼稚園教育要領が改訂されることは新しい幼児教育に徹することが可能となり、いわば一種の大義名分ができることとなり、おおいに評価されることである。

現場の保育にたずさわる者ばかりでなく、入園する幼稚園を選ぶのに「これでいいのか」と迷っていた子育て中の母親たちも、新聞等で幼稚園教育の新しい在り方を知って「迷いがふっきれた」「やっぱりこれでよかった」という声が聞かれたりした。

且て昭和三十年代に誰も彼も六領域に走ったことを思い出す、六十年代の今回も新しい方向に皆が走るだろう。しかし新しい教育要領に照らして保育を変えていくことは容易なことではないと思う。

改訂に出てくる「遊び」「自発性」「意欲」などのことばの共通理解を互に持つだけでも大変なことである。用語の分析をしたり、安易に新企画を立てるだけででき

ことではないと思う。他園との交流や、現場研究はもとより、よほどの発想の転換と柔軟性、将来への見通しと保育実践における継続した努力が必要である。このために管理者だけでなく、保育者集団全員も一つとなって分たちの保育を見直していくことが不可欠であろう。

幼稚園は子どもの遊ぶ場であり、しかも自由に遊ぶところである。しかし自由は身勝手にということではなく、まして休憩時間のようなものでもない。倉橋惣三は「幼児等は少しの自由を与えれば、すぐ満足します」と彼の名著「幼稚園真諦」の中で述べている。少しの自由ではあるが、満ち足りた純粋な自由を意味しているのであろう。今、子ども達に欠けている「主体性」や「人の関わり」も「意欲」も、ほんものの自由を土壌として育まれるべきものであると思う。

新しい教育要領がこんどこそ真の幼児教育への明かるい道しるべとなり、皆で進むことができるよう期待したい。

(武蔵野相愛幼稚園)

めがね

津守 真

その子は、朝、学校にいくと、私の机の上から眼鏡をとり、若い男の先生にかけさせて一緒に遊ぶのが常である。昨年の秋亡くなったその子の父親も眼鏡をかけていた。

その日、十二時過ぎに出かけねばならなかったので、その先生から眼鏡を返してもらった。しかしその子は承知せず、すっかり支度した私のところにそれを取りにきた。私は眼鏡を必要と思うたので、他の先生の眼鏡と代えてもらおうとした。ひとつは銀色の縁であり、もうひとつは玉の形が私のと違っていた。私のは黒い縁である。それではどうしてもだめだと、その子は、めったに出さない大きな声を出した。

そのとき、講演に出かけようとしていた私に、ひとりの職員が、「めがねをかけなければならぬようなことは、話す必要はないでしょう」と声をかけた。その一言で私の心が決まり、私は眼鏡をその子に渡し、これでよかったのだと思った。

この日、私には眼鏡を返してもらおう立派な理由をいくつも数えることはできたし、たと

え子どもが承知しないままに出かけたとしても、だれからも何も言われなかったと思う。けれども、子どもだけは、私に不信感を残したろう。そして、その点が子どもと私との間で決定的である。歩きながら、私は、同じようなことがいままでに何度もあったような気がして、それはいつだったかといろいろ考えた。

私の子どもがまだ二、三歳だったころ、どうしてもこうすると言い張って困らされたことが何度もあった。大人の側には、子どもを従わせる理由は、いくらでもあるのだが、そうしたら子どもとの間を頑なにするように思え、そう思ったとき、一方的に強行せずに、一緒にやってゆけるやり方を探した。他人からみたら、それは甘やかしているように見えたりもした。また私自身も、それで将来困ることは生じないだろうかなど、不安がなかったわけではない。しかしそれから二十年以上たってみると、あのとき心配したようなことは何も起こっていない。それぞれのときに、子どもと信頼し合い、納得しあって過ごした、それでよかったのだと思う。

その後、幼稚園でも、養護学校でも、似たような状況に何度も遭遇した。そのたびに、私は周囲の人たちに助けられながら、ようやく自分の心を立て直し、子どもを信頼することを第一に考えられるようになったことが何度もあった。こうして後になって考えると、子どもがどうしても主張することには、子どもなりの理由があるように思える。そのときには、大人の側のあまりにも立派な理由のために、あるいは他人からの批判や、根拠のない将来の不安の故に、子どもにとっての内的意味が見えなくなっている。

めがねに話をもどそう。

子どもは黒い縁の眼鏡を欲しがった。父親の眼鏡がそれに似ていたのかもしれない。最初はそれが理由だったかもしれないが、それが私の眼鏡であることも次第に意味をもってきたように思われる。何か月か以前に、彼は私に眼鏡をかけさせて、校長室のソファでゆっくりと過ごした日があった。その後、若い男の先生に私の眼鏡をかけさせて遊ぶようになった。父親の似姿をそこに見、その上に、私の存在をも重ね合わせて、学校に対する安定感を感じたのかもしれない。そう考えると、私の眼鏡でなければだめだと言いつ張ったことは、私の眼を傍に留めておきたいという主張とも言える。そうしたら、私にとっての名誉なことである。こんな考えは当たっていないかもしれない。しかし、他のどんな理由をも差しおいて、この子どもに対する信頼感を維持しつづけることを優先させたことは間違っていないかと思う。

〇めがねについてのベッテルハイムの対話

ブルーノ・ベッテルハイムは、その著書「A Home For The Heart」(1974)の中で、眼鏡についての実習生との対話を語っている。

ソフィ(実習生)「先週、アイダが来て、『あなたは新しい眼鏡をかけていますね。』と言いました。私の眼鏡は新しくありませんでした。」

ベッテルハイム「彼女がそう言ったのだから、あなたは新しい眼鏡をかけていたのでしょう。」

ソフィ「私は『いいえ、アイダ、私は新しいめがねをかけてはいませんよ、私は休暇でしばらく留守をしていたんです。』と言いました。そうしたら彼女は笑って、歩き去っていききました。……この子どもたちは、留守をしていた人と接触したいのだと思います。」

ベッテルハイム「患者の言うことは常に正しいと私はいつも言ってきたでしょう。患者の言うこと、することには理由があり、われわれにはそれが分らなくとも彼はそれを知っています……。」こう言って、ベッテルハイムは、子どもの側の内的理由に目を向けることの必要をのべる。実習生のソフィに、アイダが、「あなたは新しいめがねをかけていますね。」と言ったとき、この子どもは自分の内面的変化を打ち明けたのだというように状況を理解したら、事態は違つたように展開しただろう。それなのにソフィは「いいえ、アイダ、私は新しいめがねをかけてはいませんよ。」と言って、アイダの言ったことの内的意味をも否定したことになった。そして、アイダがわざわざこれを言ってきたのは、休暇で留守をしていた人と接触したいのだとの常識的な解釈にとどまってしまった。

この実習生は、おそらく、アイダと深く交わってきたのではないと思われる。ベッテルハイムは、これまでの経過をアイダと一緒に生きた者にとっては、アイダには内的変化が起りつつあり、いまやすべての眼鏡がこれまでとは違つたように見えてきていると述べ、次のようなことを付け加えている。

以前に、アイダは、他人が眼鏡をかけていると、とびかかってそれを取り、こわしたという。アイダの母親は極度の近視であった。アイダは母親が怒って激昂したとき、自分を見ることができないように、眼鏡をとってこわした。眼鏡はアイダにとって危険な魔力を代表するものであり、彼女は自分もそのような力をもちたいと思って、眼鏡をかけたが何も新しい力は得られなかったので、次々に眼鏡を破壊したのであった。ベッテルハイムの学校の職員たちは、眼鏡の危険な魔力から自分の身を守ろうとするアイダの努力に、共感し、協力しようとした。そして彼女はもはや、眼鏡に内在する力を必要としなくなった。「彼女の眼鏡に対する態度は変化した。いまやすべの眼鏡は『新しいめがね』になったのである。」

ここまで考えてくると、「あなたは新しいめがねをかけていますね。」とのアイダのことばに対して、ソフィが「あら、そう？」とうなずいたら、「めがねなんかもうこわくない。」とアイダは答えたかもしれない。「それはあなたにとって困惑する答えだったかもしれないが、そこに問題の核心があることが、直ちにわかったでしょう。」とベッテルハイムはいう。「新しいめがね」ということばの背後にかくされている内的意味を理解することができないままに過ぎたら、子どもは自分の問題を他人に分ってもらおうとして、もっと極端な行動を示すようになるかもしれない。そしてだれも理解してくれないと思うと、遂には、世界との接触から身をひくようになる。

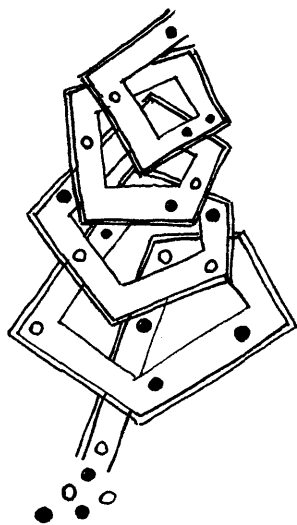
つまり、人と人との間のコミュニケーションの障害が、子どもの問題を生み、また大き

くするとの考えがここにある。

私の眼鏡でなければいやだと子どもが言い張ったとき、私は何故すぐに子どもにそれを渡してやらなかったのだろうか。その日に眼鏡がどうしても必要だったわけではないのに、私は必要だと思ったのだった。大人はこうして自分のまわりに必要の網を張りめぐらして、もっとさし迫った子どもを見えなくしているようだ。それは新たな状況に直面するたびに、何度でも破らなければならないほどに大人の存在にしみこんでいる。

この子どもにとって、眼鏡がどのような内的意味をもっているかは、まだ明瞭でない。それは、ただ父親の眼鏡に似ているというような常識的な説明ではすまないように思われる。これから互いに信頼する関係をつくり上げながら考えてゆく課題である。

(愛育養護学校)



SF 的読み解き

子どもという風景

第三十八回

やさしい狡智

堀内 守

鉄腕アトム以降

時折考えてみるのです。いったい、あの手塚治虫さんの『鉄腕アトム』に夢中になっていた世代は、いま何歳ぐらいになっているのだろうか、と。

この「何歳ぐらい」の意味あいは一筋縄ではとらえられません。かりに「四十歳になっている」という答えが出たとしても、問いは「おしまい」ということにはならないからです。「そうか、四十歳にもなっているか。すると……」とか「四十歳になっているか。ならば……」というように、つぎつぎと次なる問いを呼び起こすからです。

そのなかには「四十といえは、もう中年である。してみると、もうその子も小、中学生ぐらいで……」というように広がっていく推理の網もあるでしょうし、さらに、話題が昔に戻っていったって、「鉄腕アトムはロボット

だった。そのアトムは時折故障した。その故障の絵を見ると、アトムの胸は開かれ、コイルが見え、まるで旧式のラジオの内部に似ていた……」というような光景に通じることもありましょう。

鉄腕アトムの歌はまだ時折うたわれています。その歌詞とメロディを味わっていると、突然、アトムなる主人公が、「科学の子」であり、「正義の味方」として設定されていたことがありありときます。

今日から見ても、アトムの性格設定は大変面白く、アトムをめぐる主人公たちもそれぞれ対照的で、「ヒゲオヤジ」だの「お茶の水博士」だの「ウランちゃん」だの——の個性がよく描き分けられているのがわかります。

アトムは、ふだんはふつうの小学生と変わりはありません。しかし、ひとたび地球を脅やかす物が現われると、十万馬力のロケットの推進力で宇宙を駆けめぐり、敵を倒してしまいます。

そこにはいろいろなテーマが重なっていました。正義と邪悪、親と子、兄と妹、先生と生徒、協力、反発、誤

解、生と死、その他もろもろのテーマが。それにしても、アトムの心のやさしさには驚嘆させられます。詩情豊かです。子どもたちの心をとらえた秘密もその辺に原因があるように思われます。

かわいくなって、お茶目で、無邪気な少年の姿のロボットは、子どもたちと等身大です。ところがいったん事が起こると、アトムは強力な腕力の権化に変身してしまいます。子どもたちは、アトムに味方し、アトムに期待し、アトムに応援する。そして、アトムがきつと敵をやっつけることを信じて疑いません。

この場合、アトムが簡単に、難なく相手をやっつけてしまうとしたらストーリーは単純になります。しかし、それでは面白くありません。子どもたちは、アトムの運命にハラハラし、同情し、心配する場面を求めています。アワヤもうアトムは駄目か、というような瞬間もなくて、ストーリーが単純になってしまいます。

アトムの目

思い出すと、アトムのはまことに巨大でした。大つぶの目、大きな瞳、大きなまつ毛がアトムのシンボルです。生まれたのは昭和二十六年の『少年』誌の4月号。当初は、パイプレーヤー（脇役）に過ぎませんでした。

主人公として主役になるのが翌年です。のちに十八年間にわたって、少年少女たちのスーパースターになる鉄腕アトムは、昭和二十七年に登場したことになります。裏返していえば、十八年たっても、アトムはおとなにならず、生まれたときのまま、成長せず、もっぱら人間に奉仕するために活躍しています。

これがアトムの自己制約です。

少年のまま、成長させない。ひたすらアトムを読者に奉仕させよう。これが手塚治虫さんがみずから課した課題でもあったのです。

少年のままにいる主人公。まるでピーター・パンです。でも、ロボットとはいえ、その身体は意外にしなやかです。のみならず、ピーター・パンを超えて、アトムは幼ないが故に純粋な物の見方ができるキャラクターと

して性格づけられています。人間の文明や人間の行動に批判的ですからあります。

そのアトムの目をきわ立たせるのが、ふつうの生活におけるヒゲおやじ先生やお茶の水博士、学校友たちであることには変わりはありません。ほのぼのとした日常の中にも、誤解や誇張があり、トラブルもあれば、悲しみも存在します。このかぎりではアトムは無邪気な日常世界の住人です。

ところが、アトムがスーパースターになるには数々の悪役が必要でした。その悪役も、人間よりははるかにスケールが大きく、アトムの鉄腕をぎりぎりまで受けつけぬものである必要がありました。読者たる子どもたちは、案外こちらの戦闘場面で汗をにぎり、この場面の方を歓迎したに違いありません。

子どもの目

アトムにかぎらず、子どもたちは、さまざまな物語の主人公を相手にし何かを制作しています。それは、作者

のねらいが百パーセント完全に伝わるという形においては
ではありません。むしろ、子どもには独自のやり方があ
って、それによって子どもたちは、鉄腕アトムの物語か
ら別の何かを感じとり、読みとっていたはずです。うま
い手を使うこともあるでしょうし、離れ業をやったのけ
ることもあるでしょう。また、臨機応変のかけひきをし
たり、変幻自在な擬態もとるでしょう。このような力
(事を操る力)は、意外と古く、文字文化以前の人類社
会の知恵にも通じています。

読まれる書物は、目のおもむくままに変貌し、ふとし
たことばに誘われて別の意味を思い浮かべたり、別の意
味があるのではないかと疑ってみたり、読みながら我を
忘れ、策略をめぐるせ、組み合わせせていくのです。

こういうのが子どもの目ではないでしょうか。いや、
われわれおとなの目も実は日常生活においてはこれと同
じなのです。

一つの例をあげましょう。

「大きな声では言えないが……」という言い方がありま

す。おとなもよく使いますが、子どももよく使っていま
す。表現は多少異なることもありますが、骨格はまず右
のとおりです。子どもは同じことを演じます。「大きな
声では言えないが……」と声に出して言う代わりに、ひ
そひそ声で語るのです。それは、秘密を相手と共有する
ことの宣言でもあり、自分たちが少数派であることを告
白することでもあります。タブーの確認でもあります。

語ってはいけません。そういう約束がいかに簡単に破ら
れてしまうか。それはよく知られるとおりです。このと
きには子どもたちの方が「だれにも言ってはいけな
いよ。実は……」と言ってしまうのです。言ってしまうこ
とは、約束を破ることもありますが、秘密にしておく
ことに耐えられないからですし、案外秘密を語るには、
バクセンと表現したり、婉曲に表現する方が見破られる
手がかりを残してしまいます。「話そうか。いや、秘密
だから、言ってはならぬことになっている」と語れば、
相手はその内容をよりいっそう知りたくなるはずで
す。こういうかけひきがなされていくにつれ、黙しているこ

とはできなくなってしまうのです。挑発するのですね。

裏をかくのです。そして、相手が「知りたい」と熱心に応じ、それが盛り上がって、「おねがいだから話してよ」と屈服するまでこのゲームは続けられるのです。

これはことばを操作することでもあり、そのことを楽しむことでもあります。

口ぐせ

それと意図せずに、子どもたちがこのようなゲームを演じていることは明らかに観察することができます。彼らの口ぐせの多くは、流行とともに変わりますが、その口ぐせを収集し、分析してみると、口ぐせのなかには脚韻や頭韻をつかって意味のインパクトも強めているものが少なくないのです。

それを知ること、私たちは、子どもがいかにして話をそらすのか、話を変換させるのかについてのゲームのルールを手に入れることができましょう。

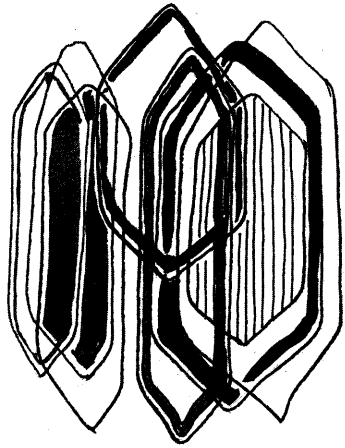
いろいろな状況に応じて行動を変えるゲームのやり方

のようなものです。

機会チャンスと結びついているこのやり方は、局面の変化に応じて打つ、手が変わっていく将棋のようなもの、といってもよいでしょう。

ゲームがこのように動いていくには、その「手の内をあかすこと」は抑制されなければなりません。定石を取り出して見せたり、それについて解説することはできませんが、ポイントは何よりもそのゲームに長じ、そのゲームで遊ぶことができなくてはなりません。

次に浮かびあがるのは、これらと定石や組み合わせの妙は、かならず一定のストーリーをなしているということです。子どもは、きのうやった遊び、きのう読んだ本等について語ります。しかし、この語り、は再現とは次元が異なっています。再現することはできないのです。一日という時間の経過は、再現よりも編集を可能にするのです。余分なところを消し、必要なところをきわ立たせ、一定の空間内で、いくつかの素材を結びつけて並べ直してみるのに似ています。



きのう起きたできごとを今日になって語る——この平凡な一行を子どもの生きた体験に即して読み解いてみると、たぶん以下のようなになるはずで。

まず、印象に残っている断片がいくつか浮かびあがる。残っていないところは淡く消え去る。

次に、その断片をつなぎ合わせる。そのつなぎ合わせる方は、時間の経過という順序も踏んではいけません。むしろ、何かの試合が終わったあとでまとめられる観戦記のようなもので、しかるべくヤマ場があり、評価もなされ

ており、オチまでついているのです。

「歴史」のもとになったことは、「できごと」であったり、「話すこと」であったりするのはよく知られたことですが、△きのう起きたできごとを今日語る▽なかにも、その原意が生きています。そして、同時に、△語る▽ということは、内容もさることながら、聴いてくれる相手がどう反応するかを含み込んだ行為ですから、調子に乗ったり、誇張したり、迎合することもあり得ます。つまり、△語り▽には少なからず△騙り▽かたがあった

り、△格好▽をつけたり、△策▽が入ったり、△作意▽や△作為▽が入ったりします。

誰がやった！

無邪気な人は、子どもに「正直に答えなさい」と言ったら、子どもは「正直に答えるだろう」と予想しているかもしれません。いたずらがあり、ケンカがある。そういう時、「誰がやったの、正直に言いなさい」と言いがちです。

でも、多くの善意の倫理学説や教育学説に反し、そう簡単に「正直に」答えないので子どもの特性です。したがって、「答えなさい」と命じた方は、はじめこそやさしい顔つきとやさしいことはづかいであっても、子どものためらいやおどおど、やさらしを前にしては、つい声も表情も変わることもありましょう。

「誰なの！ 正直に言わないと、許さないよ！」なんて。子どもの目から見ると、この段階がくる前に、その場

のフンイ気は異常なものになっていきますから、できるだけ答えを延期するのが上策です。のみならず、何となくボソボソと答えておくのがゲームの進行に合致した手なのです。狡智なのです。

狡智という表現を使ったからとて、目くじらを立てないでください。狡智は、かならずしもズルガシコイことを意味しません。むしろ、「正直に言いなさい！」という側の期待するように速やかに、とどこおりなく「私がやりました。ごめんなさい」などと、あまりにもあっさりとかブトをぬぐ子どもたちばかりでしたら不気味でしょう。これこそ古いタイプの「機械的」反応というべきで、こんな子どもたちばかりでしたら、イタズラもケンカもせず、おとなに忠実すぎるとして心配のタネになるのは確実です。

ですから、狡智は、いかにも子どもらしい状況判断を表現していると見なくてはなりません。

オトナの方も相当したたかな狡智に長けて^たいることは「正直に」などということばをためらいもなく使うとこ

ろにあらわれています。「正直」^{オホシケイ}。Honesty is the best policy.

「正直は一生の宝」と訳されたこの諺には相当な狡智が隠されています。無邪気な人は「正直」を一つの意味で解釈し、「宝」をも一つの意味で解釈します。しかし、この諺がもっとも生き生きと生きるのは商業とか外交とかのかけ引きの修羅場なのです。「宝」は、その修羅場があつてはじめてピリピリした緊張の意味を放出しはじめます。もとの諺にある「ポリシイ」が何を意味するか、あらためて指摘するまでもありません。「策」「政策」——つまり、かけ引きのやり方をまとめあげた知識です。

小さな外交官

このかけ引きは、どんなに立派な規則をつくって取り締まろうが、抑えこめるものではありません。

規則ができれば裏をかく。まるでゲームでもやるように。その結果、子どもがこの種の狡智を發揮するのは、

規則がつねに流動している場、家庭と仲間うちに限られてきます。時には、自由時間にも見られましょうが。

さきの「誰がやったの！」は、子どもの側に幾重にも広がっていく反応を引き起こします。スローモーション風にまとめましょう。

怒られるかもしれない。叱られるかもしれない。こわい目。こわい人。

叱られる程度は、いつもの経験に照らしてみると、あのくらい。ことばはきついが、あやまれば、何事もなく許してもらえる。ことばがきついのは、罰が軽い証拠。正直に申し出ると、かえってほめられることもある。ほめられようかな。どうしようかな。

右の思考は分析的に進むものではありません。一つ、次に一つ、というようなくあいに進むものでもなく、一瞬のうちにパッとわかってしまう名人芸に匹敵します。まさに外交上の手腕に似て、評価はその場ではきまりません。

「私がやりました」と申し出たのに、「なぜやった

の？」という質問が加えられたなら、この「なぜ」に答えるのははるかにむずかしくなるのは右のことから明瞭です。なぜなら、この「なぜ」は分析的に問うているからです。原因を特定せよ。原理があるはずだ。それを言え。と、いつているのに近いからです。

ところが、万事状況のなかで生きている子どもたちにとっては、一つだけ特定できる原因などは気づくこともないのです。何が起こって、時とハズミで起こるので、から、正直であろうとすればするほど「つ、い、そうになってしまっ……」とか、「気がついたら、そうになっていた」というような表現になるはずで。

「どちらが先に手を出したの？」という質問も、一連の経過を丹念にたぐり寄せてみるならば、よくわからないう問いになってしまいます。「手を出す」までの経過が長ければ、それに先だつことばや感情のやりとりがあるはずですから「どちらが先に」は、ますます特定できなくなりますし、「手を出す」が、遊びにはじまり、ふざけっこに移り、あるところからケンカに進展してしまっ

たような場合ですと、それこそ「売りことばに買いことば」に似て、「つ、い、か、つ、な、つ……」の類に落ちつかざるをえません。

やさしい狡智

鉄腕アトム、おぼQ、ドラエモン、それに最近子どもに人気のあるアニメと主人公たちの発言と行動を見てきて感じることは、狡智がやさしくなってきたということ。アトム以来、アニメの主人公たちは、人間の主人公たちに常に忠実に仕えてきました。「困った子だ」と人間の主人公に向かって公然と言いながらも、最終的には人間の主人公に忠実なのでした。

人間の主人公に対し、あきれ、毒づき、つき放しても、結局は和解していききました。それはやさしき狡智です。憎めません。

でも、それにいたるまでのドタバタ、トラブル、戦術、戦略の数々は、子どもの世界で日常よく見られる狡智の反映でした。夢想もあり、空想もあり、狡智は幾重

にも織りあげられてストーリーにまとめられています。

複雑なストーリーはいくつかのストーリーの「素」にまとめられます。その「素」を組み合わせていけば、あの狡智の内容はインソップ物語に近くまとめることもできますし、格言集にまとめあげることができます。とにかくワンパターンではありません。

いちばんふしぎに思われるのは、機嫌のいいときのおとなも子どもも、愛想よくこの狡智を表現してくれることです。

「いつもお世話になっています」

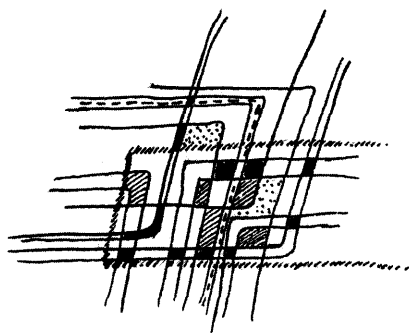
「おかげさまで」等にはじまり、「ありがとうございませす」にいたるまで、相手に対する思いやりや気遣いは、あの狡智が優美に洗練されたものであることを示しています。洗練もまた美しきかな、です。

アトムの最終回のセリフは印象的です。それは「ぼくはいつまでたっても子どもなんだ」「なぜならぼくは子どもとしてつくられたんだもの」「神さまいつまでもぼくをこのままにしといてね、おねがい……」というので

す。

ここにアトムの悲しみを讀みとるか、作者のやさしい狡智を讀みとるか、それともこれを讀んだ子どもたちの、あり得る反応をいくつも想像してみるか、それも私たちの知のたくらみの洗練にかかっています。

(名古屋大学)



子どもと(3)

六月・ゆたかに

清水 光子

五月の、日光と風とうるおいに育まれた生物が、次の成長のために何よりも大切な水を恵まれて、しばし憩いのおきを自然から与えられるのではないか、六月というのは？でも決してただ休んでいるのではなくて、木や草はたえずエネルギーを貯えるのに一生懸命だし、動物達、鳥は幼鳥が巣立ち、子馬や仔牛は野を盛んにかける六月なのだ。

「育ての心」の中の「六月」倉橋惣三先生は「外には雨が降りつづいている。部屋の内は笑い声で晴れわたっている。窓硝子はぬれて曇っているが、子ども達の顔はみんな明るく輝やいている。外からの光でなく、内からの光である。天の太陽は雲につつまれる日があっても、この小さい太陽たちは、いつだって好天気だ。」と言っておられる。

「雨の日はどうしてもエネルギーが発散出来なくて、子どもたち、さわぐし、けんかし

たりして、いやね。」という保育者の声をきくことがある。エネルギーの発散ってどういうことだろう。体を動かす、走る、大声をあげることはもとより発散の一つであろうが、もっと静かに、徐々に内への発散の仕方もあるうし、エネルギーをただ発散させればよいのではなく、内なる成長に役立たせるのが子どもをとりまく大人達の心くぼりの要点ではないかしら、と思う。少し理屈っぽくなって恥かしいけれど。

数年前ニュージーランドの幼稚園を見学した日、彼の地では珍らしくドシャ降りだった。その日の光景はまさに、前にあげた倉橋惣三先生の描かれた「六月」の光景であった。二、三人の子どもがフランス窓側で肩に手をかけて、外の芝生の水たまりが、ぼしゃぼしゃはね返っているのを眺めている。室の中の大積木の家の台所では、本物の野菜で、エプロンを掛けた小さいママがお料理を作っている。お父さん役の男の子は木片とトンカチを使って何かを作るのに懸命。そして、少し広いスペースでは女の先生がギターを弾いて、その調べに乗って十人程の男女児がダンスを踊っている。雨の日も亦楽し、など物知り顔につぶやいたりするのはなくまことに自然に、自然と一致しているのだった。

前出の「六月」の文章のあとに「またしても鬱陶しそうな顔をして見せるのはおとなだ。」とあるが「うつつうしい」というような言葉は幼児は知らなくてもいいのに、大人が教えるのだ。

筆者が幼いとき教えられた童謡に「見る見る降り出す大雨は、ザアザアザア面白や、お庭にお池が沢山できた、舟も浮ぶよ、金魚もうくよ、ああうれしいな、うれし

な、もっともっと降れ降れ」というのがあった。このあとに「雨は草木のお乳です。」とか「大川小川海へ出て」という水の旅のような歌詞がつづくのだが、子どもが雨の日をうとうしがらない気分がよくうたわれているなど、今になって感心してしまう。

雨の童謡というと思い出すのは「雨が降ります雨が降る、遊びに行きたし傘はなし、紅緒のカッコも緒が切れた」というモル調の曲、歌詞に時代の変遷を感じるとともに今の子どもは、外へ遊びに行きたいと、切実に思うのは雨の日に限らないのではないか、むしろ、雨の中を傘があるうがなかるうがバチャ／＼と水をはねちらして走りたい衝動にかられる子ども達がいるのでは？ など思ったりする。

「雨が雨が降っている、きいてごらんよ音がする、」という雨の童謡の穏やかな、イマジネーション豊かなうたの心。「雨々降れ降れ母さんが、蛇の目でお迎えうれいな」の童謡の何と活きいきしたリズムミカルな優しさあふれた詩情の豊かなこと！ 今の子ども達でも大人が心をこめて楽しく一しょにうたえば彼等のやわらかい心はきっとその心を受けいられてくれるのではないかと思う。

六月の色は水色だろうか？ 黄色だろうか？ 濃緑だろうか？ 保育室の壁飾りに、よくあじさいとかたつむりがコンピで使われる。あじさいの花は本当にこの時期にふさわしく美しい。つゆ晴れにこんもりと咲くエメラルドのような、アクアマリンのような、サファイアのように輝く花のかたまりはたとえようもなく美しい。ただ、またしても私の意地悪な言い方になるが、飾りをワンパターンにして欲しくないのだ。子どもの感じ方、それ

それを型式化してしまわないようにして欲しいのだ。

六月は目立たない木の花が咲く時期でもある。栗、かし、うつぎ など。梅雨空のうす暗い夕暮の小道に甘いような懐かしい匂いが漂ってきて、疲れた心をふと和ませられる。

『万緑叢中紅一点』のざくろのはにかんだような紅の花、谷をへだてた向いの山裾に一きわ高くまっ白に花をつけた木は何だったろう。

ゆりかごの歌に出てくるビワの実が色づくのも六月、そして二月あんなに香を楽しませ、早々と春の来たのを告げた梅が青々とつぶらな実をつけるのも六月である。つゆ、梅

雨の字のいわれは言わずもがな。さくらんぼの子どものほほに似たつややかさ。

自然は、一つ一つ説明したりみせびらかしたりしないで、着実に動き、創って積み重ねを示している。このことを子どもと一しよに深く感じたいと思う六月である。おのずから湧き起る感動が、子どもの中に、現代、兎角鈍くなったといわれる感性を豊かに育てていくのではないか、など、老婆は思ったり……。

(音羽幼稚園)



森の組から

昭和63年2月22日(月)の保育

お茶の水女子大学附属幼稚園

三歳児(二十名)

担任・村山英子先生

陽ざしに春の気配が感じられる二月下旬の月曜日、お茶の水女子大学附属幼稚園森の組の保育を見学させていただきました。

午前十時、陽のさしこむ保育室の木の机では、T君が何

やら製作中、むこうのたたみを敷いて家にしつらえてあるところでは、女の子が三人、ごっこ遊びを始めている。積み木二つをカチカチと打ち鳴らして歩いているF君、陽だまりでゴロンゴロンしながら庭を見ているC君、村山先生は机の側に立って、何か作っているT君のお手伝い。その先生から少し離れてHちゃんが椅子に坐って皆を見るときもなく見ている……(ノカナ?)

お庭では——保育室に近い砂場で黙々と砂遊びをしているAちゃん。光る黒石を集めて「チョコボールだ」「爆弾だ」と楽しんでいる二人の男児。F君、積み木を鳴らしながら、先生の所に到着。T君、作っていたものができあがったのか「探険」と言って外へ出ていく。黒石を集めていた二人もT君F君と一緒に、「お山」へ登っていく。先生、彼らを見送りながら庭へ出る階段に腰かける。C君、絵本を持って行き、先生と見はじめる。陽ざしは暖かく、ここだけは時間がゆっくり流れているのではないかと思われような空間である。

しばらくして本を読み終わったのか先生は部屋に入っ

てくる。ごっこあそびの女の子達は、どうやらお誕生会をはじめらしい。I子ちゃんがおべんとうの棚から金色の冠を持つてくる。先生、ふんわりとした口調で「それはMちゃんでしょ？ Mちゃんはお休みよ。お休みの人の使わないのね」I子は冠を手離さない。何度か言うが手離さない。「人のを使う時は大事にね」少し間があつて「I子ちゃん、又作れば？」先生は金色の紙を用意する。I子はきかない。先生は、それ以上その事には触れずに、「お山へ地図を持つて探険へ行つた人達はどうかしら、宝物、見つけたかしら」

そこへ探険隊の子達、「先生呼んで！ 先生、大変大変、F君が泣いちゃった。」先生、ゆつたりとその場で「どうして泣いちゃったの？」泣きながらF君、やつてくる。先生の背中に到着。背中に顔を埋めて落ちつく。

探険から帰つてきた女の子三人は積み木のところで「これ大根ね」「おかいもの、いつてくるわ」とままごつて始める。Hちゃん、椅子から立ち上り、三人の近くへ来て見ている。

I子が無意識に冠をもてあそぶ様子を見て、先生「I子ちゃん、Mちゃんの冠、こわれちゃう、自分のを作れば？」今度はI子うなずく。先生も手伝う。

探険から帰つてきた男の子達、外の玉砂利でふざけて転んでみる。次は砂で転んでみる。D君「先生S君が転んじゃった」声まで弾んでいる。先生、「がんばつてつて言つてあげて」D君、ニコニコして戻るとS君と玉砂利で遊び出す。しばらくして「先生、痛い」と笑っている。先生「どれどれ、見せにいらっしやい。」D君はそう言つてもらつただけで満足気。S君と遊び続ける。

C君、どこから戻つてきて、庭への階段で「あれ、ここで先生、読んでいたのに、何で終わっちゃったんだろう」と首をかしげ、部屋に入ると、先生の周りの制作の輪に入る。

それぞれの子どもで、ふわっと時が流れていく。「おこつているへび」「くらげ」と時々、C君の音が聞こえてくる。海の生き物を作っているらしい。

十時四十五分。「お帰りの用意しなくちゃ」と先生。

冠をかぶっている女の子たちに「王女様もそのおうちの
お片付けはじめてくださる？」（月曜日は三歳児のみ
十一時降園）「ゆったりとした口調で」誰が手伝って
くれるの？」子ども達、動かず。先生、お庭を見に行くが
そのまま戻ってくる。

五分ほどして、子ども達が片付け出す。「Eちゃんが
手伝ってくれた。」と先生。「KちゃんとMちゃんも手伝
ってくれてるのね。助かったわ。」と椅子を並べる。

外からも子ども達が帰ってくる。C君の製作はまだ続
いている。先生は、C君を手伝いながら、片付け、お帰
りの用意（バスケットを持ち、椅子に坐る）が同時進
行。手はしきりに動くが、ニコニコと言葉は少ない。

さらに五分後、女の子が気づき、コートを着る。二
人、三人と気づきコートを着る。やがて皆オーバーを着
て坐る。先生、コートのボタンをとめてあげる。決して
あわてない。先生、最後に「さあ、お待ちどおさま」と
椅子に坐り、皆に微笑んで、ゆっくりと「さようなら」
子ども達「さようなら」先生「今日できなかったのは明

日、続きをしましょう。」

先生、立って「今日は誰が先頭かしら」と一人一人名
を呼んで、子ども達は並ぶ。製作物を袋に入れてあげた
り、二ヶ所で起っている小さいざこざの話の聞いてあ
げて、十一時四分、子ども達はおかあさん達の待つ玄関
へと保育室を出ていく。

村山先生の、ゆったり、ふんわりとした雰囲気にかま
れながら、片付けからお帰りへのあのわずかな時間を、
子ども達をせかせせず、自らもあわてず、一日の最後の時
間を大切に過ごすことのできる村山先生の凄さに感じ入
っております。
（文責 向山）

△村山先生にお話を伺う▽

——今日は、ご無理をお願いして、特にやりにくいとい
われる月曜日の保育を見せていただき、ありがとうございます
いました。三歳児の二十名は大変ですね。おべんとうの
ない日は、月・水・土ですか。

○ええ。三歳児の三学期は、おべんとうを、一週三回に

しています。三歳児の二十名は、かなり大変ですね。一人、父親の転勤で、今は十九名ですが……。特に、今年度の一学期は泣いている人が多くて、こちらが泣きたいくらいでした。人数が多くてなかなか一人ひとりに応えてあげられませんから。

——保育時間が短い、子どもは疲れていないのに、というおおかさん方は、いらっしやいませんか。

○おおかさんのところに戻ったときに、疲れているようには見えないといっても、子どもが慣れない集団の中で生活するには、緊張し、エネルギーを必要とするのではないかしら？ その状態を続けられ、不用なトラブルが増し、子どもはいらいらし、保育者も焦る。決していい状態ではありませんね。幼稚園はいわば、子どもの社会生活のスタートです。楽しい、もう少し遊びたい、というプラスのイメージで始まってほしい。おおかさんのところに帰ることで、十分にエネルギーを回復してほしいと思うのですね。ところが、子どもが離れにくくてぐずったりする母親の中に、もっとおべんとうの回数をふや

してほしいと思っている人がいたりします。子どものことを本当に考えているのか、それとも、自分が大変だから長く預かってほしいと思っているのか、考えてしまいます。保育者の方からいっても、一つ一つの対応を大事にするには、そんなに長い時間保育できませんしね。

——お片付けからお帰りまで十五分で、あんなにゆったりとあれだけの事をなさるなんて……

○ゆっくりしているように見えましたが？ 自分ではとても焦っていたんですよ。『時間』って大人の生活の中のものでしょ。大きい組になればかなり分ってくるし、時計も読めるようになるけれど、このクラスの子どもたちにはまだ通じない。大人が急いでいるという感じで、もうお帰りなんだなって思うので、「あと五分」ていっても、どの位で五分なのかわからない。子どもはお帰りだと思おうと、あれもしたい、これもしたいと思うでしょう。子どもの姿としては無理なことだと思おうから大事にしてあげたいし……。大人の『時間』とどうやって折り合わせていくかということでしょうね。

——砂場で一人で遊んでいる子、一人でゴロンとしている子がいましたね。ここでは、その子の世界が守られていると思えました。

○子どものすることは、その子どもにとって何か意味のある表現の一つだと思うのです。その意味を考えずに、大人のよいと思う方向にひっぱることが先行しては、表現の奥にある意味が見えてこないのではないかしら？子どもが安心して、自分の中から出てくる動きに没頭して遊んでいるならば、そのことに意味があると思うから、大事に守ってあげたいと思います。

——探険隊の彼らが「先生、大変大変」と帰ってきた時、先生は、飛んでいかずにデンとしていらっしやいましたね。

○入園したばかりの頃は、飛び回ります。子どもの方から来るほどのつながりができていないし、子どもが何をするかわからない。こちらに安心感がまだないときは、絶えず子どもの状態をつかんでいないと心配ですから、あっちこっち飛んで回っています。緊急の時は、部屋の

靴のまま飛び出したりして。

今の時期ならもうそんな事はありません。むしろ、こちらがバツと動かないことで、子どもが自分で考えて、次に動くゆとりができるでしょう。さっき泣いてここに来た子どもだって、ここに来たことで自分の気持ちを収められたでしょう。前は、あのようにはいきませんでしたもの。成長したんですね。

——I子ちゃんへの先生の言葉かけにも考えさせられました。

○I子ちゃんは、前に冠を作って、家に持って帰っているんです。その時、他の人から「貸して」と言われて、貸してあげた。だから私も人のを借りてもいいんだという、I子ちゃんなりの理屈があるんですね。初め注意したときには、自分を通して、私のいうことを受け入れられなかったけれど、少し間をおいて、「お休みの友だちの冠が壊れるといけないから、自分のを作ったら」と言ったら、返すことを納得して作り始めた。どれだけ時間をかけて、どういう働きかけをすれば、大人の持ってい

る「こうあってほしい」ことと、子どもの気持が折り合
っていくか、ということですね。大人が言ったときに、
すぐ言うことをきかせることが、本当に子どもが自分か
らそうできるようになることへの近道だとは思わない
です。遠回りのように見えても、子ども自身の判断の中
に根づくためには、時間をかけることが、結局は早道な
のではないのでしょうか。

——ままごとを周りで見ていた女の子、入りたいよう
な、そうでないような……少し気になりましたが。

○あの子どものことは、私の課題なんです。自分からの
活動が少なく、子どもたちの動きを眺めていることが
多いんです。時々友だちに誘われて、ぶらんこにのった
り、ままごとに加わったり、ふざけてコマージュルの歌
を真似てみたりしますけれど、大人の誘いにはほとんど
のりません。朝、登園してきたときも、母親に朝の挨拶
を促されるのですけれど「おはよう」は言いません。ま
まごとの子どもたちを眺めているからと思って、「いっ
しょに入れてもらいましょうか」といつてみても「い

や」と首を振る。誘われるのを予期したように「いや」
って言うんです。私もいろいろと迷っていますが、今の
ところ、「いや」と言うのを予測しながらも、声をかけ
ています。家庭での母・兄・本人の関係の中に、手がか
りがないかしらと考えているのですけれど、母親が防衛
的になってしまう場合もあるので、立ち入って聞くこと
をちょっとためらっているのです。でも、少しは変って
きたのでしょうか。片付けのとき、「これ、お願い」っ
て、さり気なく言うと、先週くらいから、渡したものを
片付けてくれるようになってくれました。

拒否するというのも、その子なりの自己主張なのでし
ょうね。いろいろと働きかけながら、その子どもの表現
しているものの意味を考えていくのが私の課題です。

——まだまだお話を伺いたいのですが、時間がきてしま
いました。今日は、お忙しい中、貴重な時間を割いてい
ただき、ありがとうございました。

（○村山英子先生
編集部）

特集 傘・雨・子ども

「六月は雨量では一年の中で（東京の場合）

九月（平均191mb）に次いで二番目（平均181mb・

十月も同じ）。雨の降る日数では一番。正確に

言えば、六月中旬から七月中旬に、雨の日が多

い。六月前半は晴れて気温の上がる日が多く、

割合過ぎしやすい。」（お天気相談所）

多くの人々が自然の営みの中で作物を作って

いた頃、六月の雨は有難い雨であり、降り過ぎ

ても困る雨であった。天に祈り、知恵を巡らす

雨であり、積極的につきあう雨であった。子ども

もにとっても、同様であったろう。

傘は、いつの頃から、雨の日のものとして一

般化したのだろう。子ども達が、母親の蛇の目

傘の中から出て、自分専用の傘をさしはじめた

のはいつの頃からなのだろう。

六月の雨に、いろいろと考えてみたい。

。。。傘・雨。。。。

絵画にみる傘

——十七世紀オランダの場合——

堤 委子

傘をさす女性の姿は絵の中にしばしば登場する。しかし西洋美術に限るならばその歴史はさほど古くない。一説にオリエントから伝った傘が古代ギリシャ・ローマで用いられたが、その後跡絶え、十七世紀末から十八世紀にかけて流行したのにもなつてその頃の風俗描写に頻繁に登場しただのである。

ところが、気をつけてみるとそれ以前に傘を描いた例がぼつぼつと特にオランダ絵画の中に見出される。しかも、それらは主に聖書や神話に取材したあるいくつかの場面に見られるという点で興味深い。以下その代表的作例を紹介しよう。

「リベカとエリエゼル」、「リベカの出発」等に傘が描かれている例がある。これは旧約聖書（創世紀24章）に由来する。エリエゼルは主人アブラハムの子イサクの花嫁を探し求める旅に出る。旅中エリエゼルが水瓶の水を土地の娘に求めたところ、娘が旅人の駱駝たちにまで水を分け与えたため、その娘リベカこそ求める花嫁と、連れ帰ったという内容である。たとえばレンブラント（二六〇六一―九）による美しい素描があり、そこでは大きく開いた傘の下、鞍を着けた駱駝が脚を折って出発を待つ傍で、花嫁衣装に身を包んだリベカが家族に別れを告げている。

同じく旧約の場面でモーセを描いたものもしばしば傘が登場する。ナイル河に流された赤子のモーセをエジプト国王女が救出する「モーセ発見」、成人したモーセが兄と共に同胞の不幸を国王に訴える「パロの前のモーセとアロン」等である。たいていは国王や王女に召使いが傘をさしかけている姿で描かれる。

新約聖書では「東方三博士の礼拝」に傘が描かれることが多い。イエス生誕のお告げを受けて東方

より三人の博士がベツレヘムに到着する。コニクやレンブラントによる作例(図1)があり、いずれも博士の一人に大きく傘がさしかけられている。

他にはエチオピアの宦官の洗礼を描いた「宦官の洗礼」(使徒行伝8章)、ギリシャ神話に取材した



(図 1)

レンブラント「東方三博士の礼拝」

ストックホルム、イエーテボリ美術館

「エウロパの誘拐」、「オデュッセウスとナウシカー」等に傘が現われる例がある。

これらの作品中では、小さく描かれていて判断できない場合を除くと、傘はほとんど常に身分の高い人によって用いられている。これは、自らは傘を持たず、従者がさしかけているという表現からも明らかである。また、雨天ではなく、太陽の下、時に星空の下で用いられ、駱駝やターバン姿の人物と共に描かれることも多い。舞台はナホルの町であったり、エジプトやエチオピアであったりである。つまり傘は遠方の地の地位ある人の持ち物として表現されているといえよう。

ところで、当時の風俗画にも少し例が見られる。縁日等に店を出しては、いんちきな薬を売ったり、いいかげんな治療を施したりするクワックと呼ばれるいかさま師を描いた中に傘が見られる。大きく開かれた傘は人目をひき、その下の薬や治療の効果をもっともらしくみせたのであろうか。

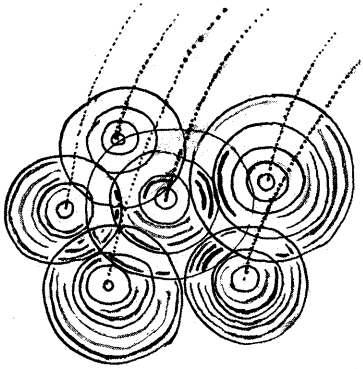
これらの傘は、主にラストマン（一五八三—一六三三）、レンブラントとその弟子たち等によって描かれている。歴史画の第一人者ラストマンにレンブラントはこのモチーフを学んだらしい。彼ら二人の画面には、骨数が多く表面に細かく波打つ、今日我々が唐傘、和傘などと総称する型が認められる。当時のオランダには東西貿易によって世界の産物が集まったから、この東洋の傘を目にする機会もあったであろう。実際、彼らは聖書や神話の世界をできるだけ正確に再現しようと、手に入る異国の衣装や小物類を利用していたのである。

ところで、傘をさす習慣は西欧人の興味をひいたらしく、マテオ・リッチの「中国キリスト布教」、アントニオ・デ・モルガの「フィリピン諸島誌」、ルイス・フロイスの「日欧文化比較」等の旅行記にそれについての記述が見られる。植民地の西欧人もすぐ採用し、リンスホーテンが「東方案内

記」にその様子を挿絵入りで紹介している。余談ながら、従者に傘を持たせ、得意気なそのさまは、我国の南蛮屏風にも見ることが出来る。また、前述のラストマンらに影響を与えたエルスハイマー（一五七九—一六一〇）も傘をさすアジアの風俗を版画化している。これら一連の記述および造形表現がヒントとなって、傘が新しく画面に登場したと思われる。

以上、オランダ絵画中の傘について概観したが、特定主題の下での表現は傘そのものが実用化されるにつれ、一応の終りをみる。十八世紀に入っては、中国趣味の絵皿や壺や調度品の装飾の中に、傘をさす東洋人として、西ヨーロッパ中に広まる。それはともかく、十七世紀オランダ絵画の中で傘は権威を象徴する異国風物であった。今日の手軽な実用品も、かつて聖書や神話の主人公の頭上を飾る大役を得て、美術史の一コマに忘れ難い姿をとどめることになったのである。

（お茶の水女子大学）



開きかけた傘・浮世絵の少女の……

森下 みさ子

浮世絵にみる限り、子どもが傘をさす姿は皆無に近い。乳母おんはひがさ日傘のごとく、幼な子が胸に抱かれ肩に負われ、或いは覚束なく歩む姿に、大きな傘がふうわりとさしかけられている図は確かにある。けれど、雨の中、子ども自らが傘をさしている図は、見当たらない。

実際、明治初頭日本を訪れた西洋人が驚き記したように、大した雨でなければ子どもは濡れるのをいとわず遊びまわっていたのだから、大雨については是非でも行かなくてはならない場所も子どもの身にはなかったのだろう。だから傘は、浮世絵界にあっては多く成人男女の手にゆだねられ、その美を開くための格好の小道具となる。時に型をとる役者の背後で輝く後光となり、時にしなをつくった女性の頭上で開く花となる。かと思れば、寄り添う男女の恋仲をほめかす相合傘ともなる。とりわけ傘を傾けた女性のなやかな姿や、傘をつぼめる女性の匂いたつ風情は、しっとりとなまめかしい媚態とみえて、傘は女性美をかなでる浮世絵の旋律の美しい装飾符となりおおせている。

*

そのなかにあつて、春信描く「五月雨」の一枚は、めずらしいかな、子どもではないが一人の少女

に傘を与え、少女自らのために（決して傘持ちの役ではなく）開かせようとしている。相傘の二人は、帯の結び方から推して若妻と侍女でもあろうか。肩に気軽にかけた手拭いと無造作に手にした布から、湯を浴びにきたところと知れる。等しく風にあおられた裾からはすんなりと細く白い脛がのぞき、前にかしぎ、或いは少女の方へと傾けられた項から、春信特有の清々しい色香がこぼれる。右側の窓枠にかけられた銭湯の看板は「明日休」を告げている。若妻と少女は、いったいどんな言葉交わしてすれちがおうとしているのか……。微かに開いた蕾みを想わせる口元にのぼった言の葉は、無



『浮世絵八華1 春信』（平凡社）より

音の声となつてふりすさぶ雨音や溝を流れる水音に紛れ、春信の空間を漂いつづけているようだ。少女はちょっと得意気に「明日は休みですってよ」とでもいったらうか。少女は湯の帰りらしい。一人前に肩にかけた手拭いは、けれど、その小さな身に余つて、ふっくり結んだ帯の背にかかつて髪をつくっている。——そして、「傘」である。春信ならではのなんともか細く小さな両の手が、少女のきゃしゃな身体にはふつりあいの大きな傘を開こうとしているのだ。女二人が入つて丁度よくらしいの傘……少女が傘を開ききつたならたちまち崩れてしまうであらうバランスを、春信は開きかけた傘を託すことでかろうじてとどめる。そのあぶなっかしさ、そして、それゆえのいとおしさと滑稽さは、大人びてみせるあまりに拙さがこぼれる少女の不可思議を想わせはしないだらうか。一人銭湯にゆくことと等しく、傘をさす行為もまた勢いっぱいのまねびであるように……。そういえば隅に描かれた母子の犬も、この女と少女の対に巧みに付け合はされているようでもある。ともあれ、少女風の美女を描いて名高い春信がことさら「少女」を筆にしたとき、開きかけた大きな傘は、女性美を彩る装飾の位置から滑りでて、その入口に足を踏みいれかけた者のあやうさの上に添えられたのである。

*

思えば、カッパにすっぽり身を包むか傘をさしてもらつていた時期から、子ども用ではあれ肩にかついでいた時期、そしてどうかこうにか両の手で支えて雨に向けて傾けるようになった時期を経て、傘は今、私の身近にある。子どもの頃、傘もまた一つの遊び道具であつたこととは別に、その扱いにくさは大人の世界へ向う路の一つでもあつたのか、わずらわしさとともにほのかな愉悅をとまなつていた。ましてそれが、一人頭上に開くことのできる色鮮やかな小さな空であり、身につける何よ

りも大きな華であってみれば……。黄色い学童傘が光を透く花柄の傘にかわった頃には、私は傘をか
つがずにさせるようになっていただろうか。この少女のように……。いみじくも春信が浮世絵の片隅
に開きかけてくれた傘は、春信ねらう少女美の世界をのぞかせながら、そんな傘との結ばれを雨音の
中にしのび聴くことを誘いかけてくる。

(お茶の水女子大学)

。。。。
雨・子ども。。。。

雨の日の保育

長山 篤子

雨の日は、大人にとって何となく気の沈みがちな日となります。子どもたちに出会っても、お天気の日のように積極的の外に出て行こうとする気持になれません。それは、大人にとっての雨は、自分の行動を制限してしまう一つの壁となってしまうからでしょう。自らの行動を、固定概念の下に制約してしまいます。

しかし、本来子どもたちの心は、大人のような固定概念に制約されるものではありません。雨の日も彼らにとっては、積極的な一日となります。

六月の雨の続いたある日、保育の中で次のような体験をしました。

四才のN君は、外遊びの大好きな子どもでした。砂場での穴掘り、園庭での河川工事は、誰よりも得意でした。園庭に長い川を掘り、ミキサー車に見立てたタイヤの中で、泥をよく捏ね、兩岸を築き上げていく様子は、私をよく感動させてくれました。(N君は、今春、工業高校に入学したと喜びの便りをくれました。その当時の興味がそのまま持続されていることに驚いています。) こんなN君でしたので、雨の日が続き室内活動だけに行動が限定されてしまいますと、気持が収まりません。「室内では、こんな事が出来るのよ」とN君に大工道具を出してすすめたり、粘土活動を取り入れたりしましたが、なかなか活動に打ち込むことが出来ませんでした。満足出来ない気持が、友達とのトラブルに繋がり、N君にとって楽しいはずの一日が、つまらない日になっていきました。私の中には、雨の日は、「室内活動で満足させるような工夫を」と云う固定概念がありました。N君のふと漏らしたことばに、ハッとさせられました。「雨の日でも外に行きたい。たくさん遊ぶことがある」私は、

「そうだったのか」とN君の気持ちを知りました。「雨の日は、外では何も出来ない」これは私の体験でした。N君は、雨の日も外で体験出来る沢山のことを知っていました。（絵本では、「まこちゃんのおたんじょうび」にしまきかやこ・こぐま社。「きいろいかき」同。「おじさんのかさ」さのようこ・ぎんがしゃ等 子どもと雨の日の出会いが楽しく描かれている）

それから、私は、N君の友達二人と一緒に傘をさして、長靴をはき園庭に出ました。水溜りに皆で顔を映し長靴でパシャンと壊す遊びから始まり、でんでん虫探しにその日は午前中を夢中で過ごしました。N君は、その日の帰りは、活き活きとした表情で満足して帰途につききました。次の日、N君は又、雨の中、外に出ることを望みました。その日は、五名の男女児と共に雨具をつけると近くの神社まで散歩に出かけることにしました。車の少ない道をゆっくり歩いていきました。途中、蛙に出会い、のろのろと道を渡る様子を最後まで見届け、みんなでホッと溜息をつきました。神社では、幼稚園では見られなかったでんでん虫があまり沢山いて驚きました。神社の階段でジャンケンをして遊びました。片手に傘を持って、ゆっくりあちこちを歩きまわり、新しい発見をすることが、こんなに面白いことであったのかと、あらためて思われた一日でした。絵本の世界で見てきた子どもと雨の日の出合いを、子どもと共に実際に体験したのは初めてでした。

雨の日は、大人の気持を消極的にしてしまいます。しかし、子どもたちは、雨の中でも出来る沢山の活動を知っていました。雨の日でなければみられない自然の動きがあることを知っていたのです。そのことを体験して以来、私は雨の日の保育は、必ず室内にあると限定することは止めました。

最近、私は、重い知恵おくれの施設をつくられた福井達雨先生の講演をうかがう機会を得ました。その折、同学園でつくられた「よい天気ありがとう」という本を紹介されました。その一頁に、同園の保母をしていらっしやる北別府理絵子さんの体験が記されていました。それは、大雨が降っている七月の半ば、園児のユリ子さんが、次のようなお祈りをしたと記しています。

「きょうは、とてもよいてんきありがとう。かわもさかなもよろこんでいます。たんぼもはたけもよろこんでいます。やまもびわこもよろこんでいます。とうきょうのひともわたしもよろこんでいます。かみさまほんとうにありがとう。」

大雨のとき「とてもよいてんきありがとう。」と心から祈ることが出来ない私は、ユリ子さんは何とすばらしい心を持っているのだらうと感動しました。そしてこうした心の動きが、あの雨の日のN君の心にあったことを思い出し、固くなってしまいがちな私の心を、打ち砕いてくれたN君に、心から感謝しました。

雨の日、子どもにとって「よいてんきありがとう」と言える体験を、保育者も共にしていきたいものです。

(女子聖学院短期大学)

泥爆弾と水爆弾

近藤 千恵子

幼稚園の庭は、折々に様々な顔をみせる。新しい仲間達を迎える気持ちをこめて、庭一面に砂を入れると、庭は春の陽を吸いこんで、やさしい銀色に光る。ままごとのご馳走作りや、両手に包みこめる程の小さな山作りが、あちこちにうまれる四月の顔である。六月頃になると、大きな穴が掘られたり山ができたり、庭はでこぼこになってくる。注意して歩かないと転んでしまいそうな、頼もしい主張を持つ顔である。

園庭の山は、一日の遊びが終る毎に高くなり、それと同じだけ、山の周りを取り巻く堀は深くひろがってきた。どこまで大きくなるのだろう、と思っていると、堀の上には丸太が渡されて、二、三步で上手に山に登り、また丸太の橋を渡って向う側へ降りて行くこども達の姿が、まるで、今日の仕事の成果を確かめているようにみえる日が続いた。そして、夕方から降りだした雨は、本降りになった。

雨上がりの翌朝、登園してきたこども達は、堀の中になっぷりと溜った泥水、濡れた山、園庭のあちらこちらにできた水溜りを、ゆっくり見まわしてから保育室へ入っていった。保育者にとって、此

の光景は予想通りであり、今日の活動はどんな展開をみせるか楽しみである。勿論、泥に汚れて気にならない身仕度で、男性保育者ならパンツ一枚のはだしで庭に出る。

山を作ったメンバーの一人、四月に入園した年中のKは、庭に出てくるとすぐ、黄色い長靴の足をそーっと泥水の堀にすべりこませた。長靴が堀の底に届かず、Kの体がふらふらしている中に、泥水は長靴を越えて流れこんでくる。Kは保育室へ戻ると、すぐはだしになってきた。泥水と素手で取り組む気持ちなのだろ。水の深さはKの膝までもあった。山はつるつると滑って、Kの挑戦を拒む。毎日渡れていた丸太の橋までがすべりやすくなって、こども達を泥の中に落すのである。もうやめられない。

雨という自然の恵みの水を、土の遊びの面白さに、こども達は我を忘れて吸いこまれてゆく。

こんな遊びの延長線上に、「泥爆弾」と「水爆弾」の遊びがある。

「泥爆弾」は、自然が作ってくれた水溜りのない日は、水道の水をバケツで運び、水溜りを作ることから始まる泥だんご合戦であるが、首から上は狙わない、無差別攻撃はしない、と、暗黙の了解がある。たっぶりの茶色い水溜りへ、保育者が大きな泥を落とす。「ポシャン」と飛び散る泥水で、こども達は顔から体まで泥んこの水玉模様になってしまう。反撃の泥爆弾が保育者の背中に当たって「うーん、やられた」と、泥の中に倒れる。泥の中を追いかけすべったり、逃げて転んだりして、誰なのかわからない程の泥だらけになる接近戦と、水溜りの中に泥爆弾を投げ、はね返る泥水で相手を泥だらけにする頭脳戦がある。時をみはからって、保育室の前にベビープラスのお風呂を用意する。燃焼しきったこども達は、気持ちよさそうにお湯の中に体をのばす。着替えをすませてお弁当である。

「水爆弾」は、水をかけ合う遊びである。泥のように汚れないところに一般性がある。気温が高くなってくる季節、朝からの遊びが低調になる十時半頃に、どこからともなく発生する。誰かがマヨネーズ容器などに水を入れ、水鉄砲のように水をとばす。ちよつと濡れただけでメソメソすることもが、「大丈夫。いっしょにやろう。」と言う保育者の援助で、水爆弾の遊びの仲間となり、水を入れた容器を持って走れるようになる。仲間に入りたようにみえながら、一人あそびを続けていたことも水爆弾をきっかけに遊びのメンバーとして位置づく。水爆弾を嫌って庭の隅に衝立てを立て、ままごとやお姫さまごっこを続けることも達もいる。

大きなグループ同士の水爆弾はすごい。例えば剣ごっこグループが泥だんご屋グループに向かって攻撃を始めれば、泥だんご屋グループも「よし」と受けて立つ。時々マヨネーズ容器では物足りず、バケツの水爆弾がでくると、双方ずぶ濡れとなって終りである。やってみた人にしか解らない解放感と快感なのだろう。また、ベビーバスのお風呂を用意する私である。

お母さんにきちんと着せられた服を汚せない、濡らせない、脱げないことも達と出逢う事が多くなっている。こども達の姿があるがまゝに受容する一方、ここいらでやってみようかと、保育者チームが話し合い、こんな遊びにまきこむ。誰が名づけたのか、多分、こども達がこう呼び始めたのだと思う。



(まんとみ幼稚園)

〔撮影〕 浅田 恒穂氏

雨

北原 白秋・作詞

雨が降ります 雨が降る
遊びに行きたし かさはなし
紅緒のかつこも 緒がきれた
雨が降ります 雨が降る
いやでもおうちで 遊びましょう
千代紙折りましょう たたみましょう
雨が降ります 雨が降る
けんけん子鳩が 今ないた
子鳩も寒かる さびしかろ
雨が降ります 雨が降る
お人形寝かせど まだやまぬ
お線香花火も みなたいた
雨が降ります 雨が降る
昼も降る降る 夜も降る
雨が降ります 雨が降る

四季の雨

尋常小学校唱歌

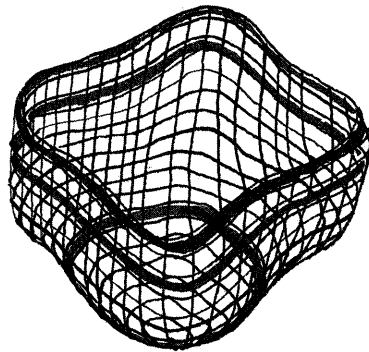
降るとも見えじ 春の雨
水に輪をかく 波なくば
煙るとばかり 思わせて
降るとも見えじ 春の雨
にわかにも過ぐる 夏の雨
物干しざおに 白露を
名残としばし 光らせて
にわかにも過ぐる 夏の雨
折々そそぐ 秋の雨
木の葉木の実を 野に山に
色様々に 染めなして
折々そそぐ 秋の雨
聞くだに寒き 冬の雨
窓の小笹 さやさやと
更けゆく夜半を 訪れて
聞くだに寒き 冬の雨

南の島の子どもたち(2)

想像性が豊かな

ホノカちゃんのこと

浅野 恵美子



「幽霊がつどう幼児期」という言葉は、シェリィという英国の詩人が「縛めを解かれたプロメテウス」で使ったようである。この言葉が私の心をひきつけてから久しい。この言葉には、子どもの心理への洞察と人間の心の興味ある仕組みへのヒントが語られるように感じられ

る。

子どもたちは、幽霊ばなしが大好きである。先回、話題にしたM保育所の子どもたちも幽霊ばなしが大好きだ。そうで保育たちは自作の幽霊ばなしを聞かせているようだ。それは、語り聞かせという形で、7、8月の保育内容の中にすっかり入っていた。思い起こせば、沖縄で生まれ育った私自身、幼年時代には、幽霊のはなしを聞くことが大好きであった。自分でも幽霊話を作り、小さい子どもたちに聞かせることもしたものだ。

子どもたちの幽霊好きは、空想や想像の世界での遊びとつながっているようだ。私は、保育養成にかかわっている関係上、学生の実習を視察する為に保育園を訪れることがある。私が訪問すると子どもたちは、興味を示して寄ってくる。彼らの期待に応えて遊んでやると、単純な遊びのおいかけっこからおぼけごっこへと発展する。ある時、私は、ユウレイと言いつつ手をだらりと示して追いかけた。すると、追いつかれ捕まえられそうになった一人の男の子は、恐怖で腰をぬかして、私にヤメテク

レとまなざしで懇願した。私は、彼の恐怖に逆にショックを受けた。この子は、私の心より、想像上の幽霊を見ていると思った。自分たちがつくったイメージをこんなにもいきいきと実感できることが驚きであった。

何処でも子どもたちは、幽霊が好きと思われるが、特に沖縄という地域は、幽霊たちがいきいきとその存在を受容されている地域であると思う。子どもにとって、我々にとって幽霊とは何なのか。今回は、そんなことを幽霊を恐れたホノカちゃんと共に考えてみることにする。

ホノカちゃんのこと

ホノカちゃんは、沖縄の中心、那覇市から、車で約二時間以上かかる北方の地、本部町にあるドリーム保育園の二歳児クラスに在籍している子どもである。私が彼女のことを知ったのは、沖縄私立保育園連盟乳児保育研究会での研究発表を通じてである。この研究会は、沖縄本島内の認可私立の各保育園から一、二人の参加で、毎月1回、午後2時―5時の勤務時間中の3時間、30人くら

いの参加で二ねんにわたってなされた。私は、顧問的に参加させていただき現場の様々な事例から学び、考える貴重な学習をさせていただいた。

ホノカちゃんは、この研究会で「園に慣れにくい子」というテーマで実践報告された。保母の実践記録から、ホノカちゃんのことをざっと紹介することからはじめよう。

登園拒否が激しかった一年目のホノカちゃん

ホノカちゃんは、せともの業を営む大卒の父親と短大の保育科を卒業している母親との間の第一子として誕生した。母親が、出産の為、1986年、4月、1歳9か月で入園している。毎日のように泣いて登園して、父親と保母たちは大変であったようだ。その頃も夜中、急に起きてなきだす睡眠障害はしばしばみられたようだ。

5月には、だいぶ落着きはしたが、登園拒否は続いていた。言葉がはつきりしていて、保母が「学校好き?」とか「先生好き?」とか聞くとどちらも「スキ」と答える

るが、家で親が同じ質問をすると「ガッコウイヤー」といい「センセイイヤー」と答えていたそうだ。そんな状態で、月の半分は欠席という状態であった。

8月、両親は、毎日登園拒否で子どもがかわいそうだから保育園を止めさせようかと相談している。保母たちは、朝、イヤーと拒否するわりには、登園してしまえばケロッとしているので様子を見ようと助言したようだ。

9月、運動会をきっかけにして園でも楽しそうに遊ぶようになったようだ。家では、学校（沖縄では保育園も学校と呼ぶことが多い）は「タノシイ」と言いつつも「イカナイ」と言うとのこと。

10月―12月、すっかり、園生活に慣れている様であり会話はなすが、友だちの側で遊んだり何か手伝ったり、絵本をつくり読みで聞かせたり、自分から友だちにとけこもうとする姿がみられるようになる。家でも、絵本を自分で創って読むのが大好きである。親におこられたことをいつまでも覚えており、何日かたってから人に教えたりするので、困るところもあるが、お話が上手に



絵本の「つくり読み」をするホノカちゃん

なり毎日が楽しいと母親からの報告。

1月―3月、担任の産休代替保母が又交替というハプニングがあったが、ペースをくずさず登園できた。

以上が一年目の大筋の様子である。一年目は、両親が家で商売をしていて休むことが可能であるという条件も手伝ってであろうと思われるが、出席率が非常に悪かったが、保育園には、慣れることができたようである。

作り話に凝った二年目のホノカちゃん

1987年、4月、2歳9か月。親、保母ともに一年目の反省をし毎日保育園に来ることを目標にしようとする。その成果があって皆出席になったものの、無理をさせたのか、夜泣きやおねしょが続いた。子どもに合わせて登園させようと保母と母親とでまた反省。

5月、朝になると園に行くのをしぶる様になり、口実として「熱が出テルカラ休ム」とか、「先生ガ公園デ遊ビナサイッテイテイタ」とか、思いつきで嘘を言うが

親に説得されて行く日もある。後半頃から、夜中おきだし母親の耳元で「アレッ、ダレカガイル」といってチョコウチヨを追うしぐさで「トツテチョコウダイ」といっては騒ぎ家中の人を起こす。そして、昼夜をかまわず、何かをみつけたように追いかけて回って遊んでいる。それを「ドラエモン、オバケノＱ太郎」だと言う。親は悩み、専門書等で調べたりして、第一反抗期の為と考えた。

6月、保育園では、元気がなく、かまってほしい甘えがみられる。午睡、寝つけず、ずっと起きていることがたまにある。

家では、園に行くのを拒否し、一人遊びをする。いろいろな物を並べて保育園や海洋記念公園だと示したり、子どもたちが遊んでいると空想して話す。「店ノ近クニ幽霊ガイルンダッテサー。先生モイッテイタヨ。ピンボートドアラ開ケタラ中ニイタヨ。先生ノソバニイテビツクリンタトイッテイタヨ。」と作り話を言う。幽霊ってどんなものかと聞くと両手で動作してみせ、「ドラエモン、コンナシテルヨ。」と話す。母親は、先月から続

いている作り話や動作が普通じゃないと感じ、母親自身、精神的肉体的に参ってしまった、病院に相談に行く。病院では神経的なものと診断される。両親は、変な行動を取るのには、自分に気をひかす為もあるのではと考え、ホノカが変な行動をすると同じように親もやる。

7月、3歳になる。遊びは、先月より多くなり、ケンカもたびたびみられる。盆踊りの練習ではおばＱ、ドラエモン音頭が流れるとおびえた様に保母の足にしがみつき恐がって踊らないが、毎日曲を聞いているうちに慣れてきたのか喜んで参加するようになった。午睡時、「オバケノＱタロウガイル」等とわけのわからないことを言う。何処にいるかと何度聞いても「イル」と言う。

8月、運動会の練習が始まると休みも少なくなり、練習に喜んで参加する。

9月―10月、笑顔が良くみられ、友達との遊びも活発になり、気のあう美知子ちゃんと二人で追いかっこをしたり、着替えを手伝ったりと一緒に過ごすことが多くなり楽しそうにみえるが、朝になるとやはり、「ガッコ

ウイカナイ」と拒否する時もある。園でもおしゃべりが盛んになり、友達同志で少しづつ話すようになってきている。保育日数25日中、6日欠席。

以上が二年目のホノカちゃんの様子である。保育園への出席率は、改善はされたが、全体として低い。言葉の発達が著しく、一人で話をつくりつつ、想像の世界で遊んだのである。幽霊がいるとって保育を驚かすことは、少なくなったようだ。

ホノカちゃんの心をどう理解するか

育児というものは、理論通りにいくことは少なく混乱することが多いものだ。特に、第一子の場合は、試行錯誤的になってしまう。ホノカちゃんの両親も最初の子でかなり困惑したであろう。保母たちも少しばかり巻き込まれ動揺したようだ。親と共に悩んでいたからだ。

保育園拒否はあったが、言葉が達者で想像力の豊かなホノカちゃんであった。しかし、その想像力は、マイナ

スにも働いた。幼児期というものは、このように空想と現実が混同しやすい時期ではあるが、それだけでかたづけることのできない問題もあったと思われる。

私は、この事例に出会った時、①ホノカちゃんの登園拒否は、本人の気持や欲求に合わせすぎたところからきていること、②夜中に何かを恐れる症状は、睡眠障害の夜驚というもので、特に想像力、言葉による思考力が盛んになる幼児期後期から、小学校低学年にかけて、けっこう頻繁にみられること、③ホノカちゃんの場合は、早い時期にでており、体を使つての遊びが少なく観念的な世界を育てすぎたきらいがあるであろうとコメントした。

このコメントの夜驚という診断が、以外にも母親と保母をホッとさせたようだ。保母も母親も、ホノカの幽霊や夜中の異常な振舞いに、うそとは知りつつも、科学的には説明のつかないものだと感じていたらしい。ホノカちゃんの行動は神秘的なものに映り、霊のことを扱うユタにでも相談に行かねばならないのだろうかと思ったこ

ともあったらしい。

考えてみれば、それは無理もないことだったかも知れぬ。子どもが見えないお化けを指さし追いかければ、誰でも気持悪くなってしまふ。私自身の経験でも、ホノカちゃんぐらゐの年齢で言葉が達者であった息子が「幽霊ガイル」と言っていたことがあり、嫌な気分であった。本当に幽霊が見えるのかしらと考えたものだ。

ホノカちゃんは、幽霊を見たのではなく、幽霊を想像したのだ。何故なら、ホノカちゃんの幽霊は、あのテレビや漫画でおなじみの明るいドラエモンであり、おぼQであったからだ。ホノカちゃんは、おぼQやドラエモンに何やら怖いイメージを拭き込んでしまったのだ。又、自分の不安を幽霊に語らせたのだ。

ホノカちゃんの保育課題

発表者である保母の作った乳児保育研究会の記録を読み直していると、ホノカちゃんの生活リズムについての質問が出ており、答えとして、夜おそく寝て、朝はいつ

も起こされてぐずる傾向があると報告されている。

睡眠不足は、大人でも妄想を引き起こしやすいのだ。

おそらく、ホノカちゃんに、親は厳しい態度がとれずに夜更しさせてしまいやすい状況があったろう。又、沖縄の雰囲気としてある夜更し文化も思い起こされる。沖縄は他県と比較して、就寝時間がおそく子どもの睡眠時間が短いということが指摘されている。

この厳しい態度がとれないということは、ホノカちゃんの気持や要求を大事にしたことであり、言語生活の豊かさに繋がったであろう。それが、同時に彼女の混乱にも繋がっていったのである。

子どもというものは、自分の内部の感性で何が良いもので何が排除すべきものかわからないと思われる。例えば、赤ちゃんの夜泣きであるが、やさしい両親が丁寧に付き合うといつまでも治らないが、ほっておくとおさまってしまうことは多い。子どもの小さな不安にも気づいてあげるとは、子どもの側からすれば、そのささいな不安が大きな実在的な不安になる可能性がある。ホノカ

ちゃんのお母さんの専門性にうらうちされた丁寧なやさしさが、裏目にでた可能性も強いと思う。

保育園拒否にしても同じことが考えられる。保育園に慣れるのに時間がかかりすぎているのだ。もし、彼女が外勤の母親の子であれば、現実の必要が慣れさせてくれなくてはである。

ホノカちゃんに、徐々に現実の必要を教え、学ばせることが課題であろう。その時、彼女の心は、健全に現実的に流れ、発達のペースを掴むと思う。

我々にとっての幽霊

ホノカちゃんの問題について私なりの見解を書かせていただいたが、彼女の問題は、多くのことを気付かせてくれる。幽霊や幻や不安は、心の秩序がしっかりできていない状況で、我々を振り回すのだ。子どもの心は心の秩序が確立しておらず、何でも受け入れてしまうのである。だから、子どもの心においては、幽霊たちの活躍の余地が大きいのである。

ところで、私は、幽霊を人間のおもいこみの産物として単純に片付けようと言うのではない。幽霊にも言葉として存在している以上、何かの役目があるはずである。

沖繩では、戦後四十年すぎてなお、戦争で死んだ人のことが語られ、野ざらしになっている遺骨が一つひとつ拾われ、鎮魂の祈りが捧げられている。惨い戦争を体験した人々の心の中に、深く押し込められ語られずにきた幽霊たちが、語る時を得たかのようなのである。

幽霊は、人間の不安と想像の産物という側面もあるが同時に、愛されずに一生を終えた人への、生きている側の痛恨からも生まれているのである。人々は、幽霊を通して人間の心を語っているのである。幽霊とは、何よりも平和を希求する人間の心なのではないか。本当の平和が訪れた時、幽霊たちは、安心して眠りにつくのではないか。幽霊を恐れることなく、祈りをもって平和をつくりていきたいと思う。

(沖繩キリスト教短期大学)

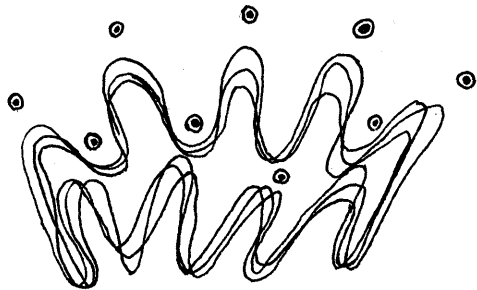
若いお母さんたちへ

大きくなるということ

はるにれの会

宮里 暁美

3歳から4歳への、愉快的な階段を、弟誕生というドラマを味わいつつのぼっていった啓吾。彼が、折にふれ言ったり行ったりしたことをふりかえってみながら、へだきくなる」ということについて考えてみたい。



▼手が届く▲

——寝る前に歯みがきをしていると、洗面台のところであと思い出したというように「けいご、小さいときこんなだったんだよねー。」（しゃがみこんで洗面台に手が届かないふりをする）

「そうだね！」と私もその頃を思い出し、大きくなったもんだ、と思っていると、

「こんなにおおきくなって、ふしぎだね！きつと、こうたもそうなるよ、たのしみだね！」としみじみと言う。

（4歳0か月）——

手が届く、ということは、成長の象徴ともいえる。啓吾はこの半年前、はじめて踏み台なしで洗面台に手が届いた。

「けいごおおきくなったよ！」と喜びの声をあげていた。

それから半年、もう今では楽々と手を洗い、顔を洗うことができる。

それがある日、ふっと思い出したのだろう。自分がま

だずっと小さくて、手が届かなかった頃のことを。

小さいころの服を今の自分の体にあてて、いかに自分が大きくなったかを味わうのと同じように、彼は「小さくて手の届かない自分」というのをやってみる。そして、考えられないという風につぶやくのだ。ふしぎだねー、と。

大きくなった、というその事実を、彼は、小さかった自分の思い出に照らしながら確かめている。

▼耕太を抱く▲

ある日、電話をかけている私の視界の隅を思いがけない姿が横切っていった。

それは、生後2か月のようなやく首がしっかりしはじめた耕太を抱いて（かかえて）そろりそろりと歩いている啓吾の姿だった。大きな声を出してびっくりさせたらよいけいけいと思ひ、息をつめて見送っている内に啓吾は目的を達し、耕太を床に寝かせた。それ以来、啓吾はいつも確信を持って耕太を抱いて歩く。

抱く、という行為もまた、「大きい」ということを実感させる行為なのだろう。

近所に1歳になるノントンという女の子がいる。彼女は3人兄弟の末っ子なのだけれど、耕太にとっても興味を示し寄ってくる。頭をなで、ほっぺたをさわって、そして、抱こうとする。自分が抱かれてきたように、今度は自分が抱こうとする。ようやく歩けるようになった彼女に、耕太が抱けるはずもないけれど、「アッコ、アッコ(だっこ)」と言って耕太の体を回し、おしりを振っているその姿全体から、「わたしのほうが大きい！」という叫びがきこえてくるようだ。

▲一人で出て行く▲

——今朝、「生協の牛乳を取りに下に(我が家は3階)行ってくれる?」と頼むと、(いつもは私と二人で行っている)

「うん、もうけいごは大きくなったもん、いける」と元気な返事。でも、また考えて

「ちょっとだけ寂しい……」上から見て、けいごーてよんでね。」などと言っている。まだ無理かな、と考えていると階段からにぎやかな声がきこえる。「あれ、なんか声がする!」とのぞいてみると、4階のゆうこちゃん、おさむくん兄弟がけんかをしつつ牛乳を取りに行くところだった。

おさむ君(一年生)に、「けいごも一緒に連れてって、けいごんち牛乳二つなの!」と頼むと「じゃあ、四つだね」と自分のうちの分と合わせて数を言いつつ、けいごを引き連れて牛乳を取りにでかけていった。(3歳8か月)——

我が家は、五階立てのマンション。鉄の重い扉が我が家と外界を仕切っている。ベランダには気楽に出て行けても、さて扉をあけて外へ、となるとまだ一人では行けない。行けそうだけれど、やっぱり不安。だから、「ちょっとだけ寂しい」と言い、「見ててね」と言う。

扉が閉まってしまうと家の中もお母さんの顔も何も見えない。庭があつて路地があつてという家並とはちがっ

て、こういうマンションゆえの不安感だとも言える。

だから、「一人で出て行けた時」それは大きな自信につながる、と私は思っている。

この朝、おさむ君に連れられて牛乳取りに行くことのできた啓吾は、それから、友達と一緒になら、あっちこっちと行けるようになっていく。そして、先日（4歳1か月）とうとう一人で、二つ隣の階段にいるじゅんちゃんの家まで行っていくことができた。

彼は、こうして着実に「出て行く」体験を積んでいく。それでもやっぱり「ちょっと寂しく」て、どうしようかなーと考えたりしている。そうやって揺れながら、大きくなっている。

▼シャンプーをする ▲

啓吾は水がこわい。水が顔にかかって目に入るのがいや。だけど、保育園でもプールをやるし、がんばろう、という気持はある。

だから、シャンプーする、と決めれば、かなり大胆に

ザバーツと頭に湯をかけている。

問題なのは、決めるまでの時間。

「きょうシャンプーするの？」

「そうねえ。した方がいいんじゃないの？」

「えー！ なんですか？ やだなー！」

その押し問答につきあえる時であれば、めんどうくさくなって「ゴチャゴチャ言っていないのー」とどなりたくなる時もある。

しばらく放っておこうということで、四、五日シャンプーをしない日が続いた。夏でもあり、だいぶ汗くさい。それでも例のごとく、「きょうシャンプーするの？」と書いてきた。「しなくてもいいけど、くさいなー、りさちゃん、くさいなーって、けいごのこときらいになっちゃうかもしれないよ」と言うと、途端にとても心配そうな顔になり、シャンプーすることに決めることができた。それから、遠足がうれしくてシャンプーしたり、いいことがあるとシャンプーしたりしているけれど、基本的には、やっぱりシャンプーは苦手。それが証拠に、保

育園で注射をした日に、私の顔をみるなり大きな声で言ったものだ。

「けいご注射したの！ だからオフロも入れないし、シャンプーもしれないの！」

どうやら注射の痛みもオフロ・シャンプーなしの魅力の前では目じゃなくなってしまうようなのだ。

それでも、保育園のプールでバシヤバシヤともぐっている年上の子どもの達の姿を横目でみていて、彼はいろいろ思うところがあるようで

「あー、今日プールのいいな」と言いつつも

「ケイゴね、こんだけ（4本の指を立てて、4歳ということ）になったらもぐれるんだよ。」と予言する。

そして今年の一月、めでたく4歳になった時、彼はちよつとあわてて言い直した。

「ケイゴね、こんだけになって、こんだけになったらおよげるんだよ。」

5本の指を両方合わせて10本、そのくらい大きくなるのはまだずーっと先のようで、啓吾はほっと一息ついて

いた。

▼自転車に乗る▲

街の中を自動車に乗った子ども達が走り回る。いつからだったのか、啓吾が自転車に乗りたいたい、と言いつ出したのは。

友達の新しや君の自転車の後に乗せてもらう。近所の友達に自転車を貸してもらう。

「あの木のところまで」という約束で自転車に乗った啓吾は必死でペダルをこいだ。約束の木を越しても彼はこぎ続け、「だめだよ」という声をふり払うようにこぎ続け、とうとう追いつかれて自転車をとり返されてしまうまで、彼はこぎ続けた。

残念そうに自転車を降りながら、彼は私の方をふり返り言った。

「けいご4つになったら自転車買うんだもんね。」

「すぐ」ではなく「待つ」ことも大切なように思えて「4つになったら」という約束をとりつけた。

「自転車〓4つ」と心の中でくり返していたであろう頃

に、こんなことがあった。

むこうから自転車に乗ったどうみても3歳前くらいの子がやってくる。啓吾はびっくりしたようにその姿を見送り、

「あの子、小さいのに乗ってたねー」とつぶやいた。

補助輪付き自転車は、ほとんど三輪車の感覚で乗られている現代なのだから、考えてみれば当然の姿なのだろうけれど、啓吾にとっては大きな驚きだった。

結局、上に住んでいるおさむ君のおさりの自転車をもらうことになり、4歳より少し前に啓吾は自転車を手に入れたけれど、その時もまた印象的なことがあった。

おさむ君の家の玄関においてあった自転車をもらいに行くと、啓吾はうれしくて自分で持って、階段を降りようとしたのだ。

自分のものという意識は、自分で持つということと同じなのだろう。耕太を抱こうとする気持と同じ流れがそこにある。

自転車をもらって数日後、啓吾は公園で知り合いに会

うとしきりに後に乗るようにすすめていた。後に乗せてもらった経験が彼にそういう気持をおこさせている。

そしてたぶん、後に乗っていた小さい自分から、後に乗せてあげている大きい自分への転換を彼はイメージしているのだろうと私は思う。

3歳から4歳への愉快的階段をのぼったりおりたりして遊んでいる啓吾。彼が〈大きくなった〉という気持を味わったと思われる動きをあげてみた。

それは、手が届くことであり、耕太を抱くことであり、一人で出て行くことであつた。シャンプーすることであり、自転車に乗ることもあつた。

そういう何気ない日々の暮しの中で、彼は、大きくなっていく自分を味わったり確かめたりしている。

私は、彼の〈大きくなる〉という気持によりそうことで、少しずつ未知な世界へ人間にとつての成長を垣間見させてもらっているような気がする。

子育ての楽しみが、また一つふくらんでいく。

最後に、啓吾がある朝、気分良く歌っていた歌を紹介して、今回のレポートを終ろうと思う。この歌の中には「大きくなる」気分がいっぱいです。

いちねんせいになったらね

しょうがくせいになったらね

いちねんせいになったらね

しょうがくせいにいくぜ

おたのしみ

お・た・の・し・み

いちねんせいになったらね

あめもかって いいぜ

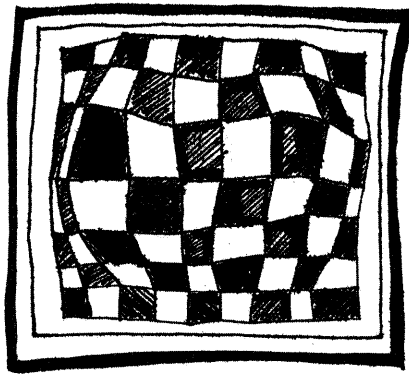
いちねんせいになったらね

がっこうも ひとりでいける

いちねんせいになったらね

おにいちゃんになったらね

(3歳6か月)



読者の方から、お便りをいただきました。

「幼児の教育」の愛読者です。二十年前、三十歳、家庭をもってから、ご縁があり、保育免許を使うことになりました。四十年代に入ったばかりの当時は、幼児教育に関する情報は少く、何を手がかりに毎日を探すにはよく迷う毎日でした。光の失せた目をした子が自由遊びの時にだけみせる輝き。ふき出るエネルギー。熱心さ。何かを訴えているようにも思えました。このところを活用して保育ができないか。探し求めて、行きついたのが「幼児の教育」でした。以来、この雑誌は私の支えであり、保育の考え方の示唆を与えてくれました。(中略)

保育への示唆を与えてくださる方々の文字で埋めてほしいと願っています。ありがとうございます。努力します。

六月―梅雨―じめじめ―の連想は、あまりに固定化しすぎていないだろうか？「五月晴れ」は梅雨の晴れまの意味だ

と、新聞の天気欄にあった……。

それにしても、車がこれほどまでに普及し、道路も舗装されている現代、子ども達は、傘をさし、長靴をはいて、雨を楽しむことがあるのだろうか？水溜まりも、はねも、泥くさくなくなつた。今、泥に出会うためには、土を探し、水運ばなくてはならない。たいそうなことになつたものだ。

こんなことがあつた。霧雨の中、あじさいの若葉が繁る中で、子ども達が遊んでいる。若葉のムツとする中、そこだけはおかしい色の傘の花が咲き、空気がひんやりと透きとおっている様。手足は泥んこ、足もとは泥団子がいっぱい。生命には、緑と雨が似あうなど思っているところへ、「こんなに泥んこになつて!! 雨が降ってるでしょ、家へ入りなさい」と大きな声。その時はなす術もなかったけれど、声の主に「雨と子どもって似あいますね」そう話しかければよかったと、今、思う。

（Ｙ）

幼児の教育 第八十七巻 第六号

六月号 ©

定価 四〇〇円

昭和六十三年 五月二十五日 印刷

昭和六十三年 六月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一―九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

これ一冊で夏の園生活はキマリ!

夏の季節に最適の保育教材のヒント、資料集

夏季保育ヒント集



- ・最近、こどもの経験をひろげるため、夏季のいろいろな保育が活発です。
- ・その指導に必要な、すぐ使えるイラスト入り保育資料です。
- ・すべて実践した園から提供されたアイデア、ヒントばかりです。



本誌の内容より

- 夏季保育のカリキュラムの例
- プールあそびの資料
- ゲーム、クイズ、手品の資料

●お泊り保育の資料

- キャンプファイヤー、クッキング、キャンプソングなど

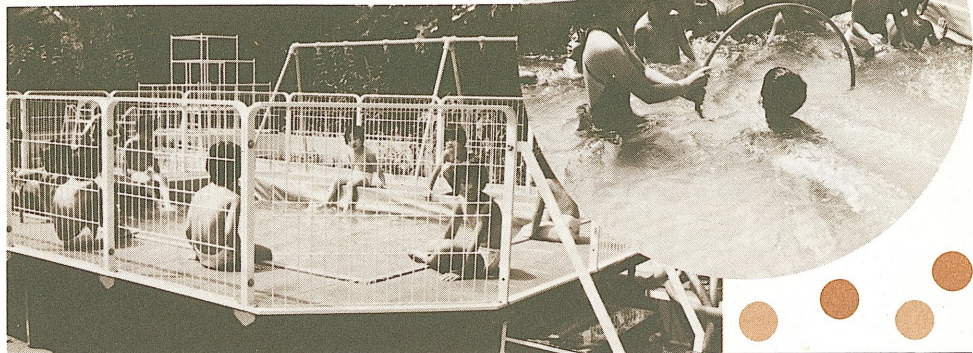
●夏祭りの資料

- みこし、花火大会、盆踊り、縁日など
- 家庭への注意
- おたよりの例など

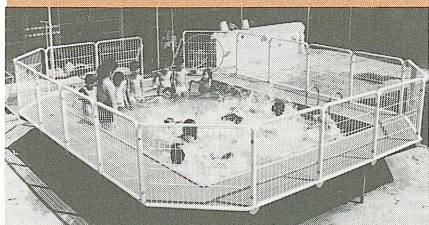
福田淑子・山田誠一・渡辺真一 編著

B5判・144頁・定価1,700円

ワンタッチ組み立て、 テラスつきプール「NSPプール」



NSPプール



- 06-34 S型標準セット 2337-01 ￥1,090,000
- 06-46 S型標準セット 2337-02 ￥1,322,000
- 06-48 S型標準セット 2337-03 ￥1,495,000

プールサイドは65cm幅のテラス、高さ80cmのフェンス付。出入口は旋錠できます。組立・解体が簡単(2~3人で半日)です。スペースに合わせてサイズを決められます。別売の自吸式浄水器による強制排水方式もあります。

収納は3.3㎡に収まるコンパクト設計。水深90cmの09型もあります。

型	プール内寸法(m)	水量	プール外寸法(m)
06-34S	3.75×2.85×0.6	6.4㎡	5.2×4.3×1.4
06-46S	5.55×3.75×0.6	12.4㎡	7.0×5.2×1.4
06-48S	7.35×3.75×0.6	15.5㎡	8.8×5.2×1.4

付属品内容

浄水器・消毒殺菌剤・水中クリーナー・内部階段・水質検査器具・シャワー・洗眼

とーりゃんせ



2335-00 特殊軟質塩化ビニール製
1セット 8m×2本 ￥30,000

ホースのスリットから霧状に水をふき上げるので、あたりがソフトで、園児が水に慣れる、水に親しむのに最適な水遊び用品です。取付設置が簡単なので、自由な使い方ができます。

